



下卷余

奥義抄下之下

問答

一 抄りや

二 ひろりき

三 神国

四 うしろみ

五 二四八付

六 ひろりき

七 ひろりき

八 ひろりき

九 小車乃りき

十 ひろりき

十一 せりき

十二 ひろりき

十三 ひろりき

十四 ひろりき

五十	の神	六十	かた	付神樂
七十	とて馬	八十	い	
	付車も			
九十	誹諧奇	十二	譬喻奇	
一七	長歌短奇	二七	反歌	
三九	旋騷奇	四九	混本調	

一 問云 古事よかひやうとてあつたは事か
 答云 ういやはいなるは果てな事なりとていふも地
 阿のいふもよけと云物をなすなりとていふも
 只此ひのわがくもさういふなりとていふも
 海もさういふなりとていふなりとていふも
 うもさういふなりとていふなりとていふも
 のもさういふなりとていふなりとていふも
 里もさういふなりとていふなりとていふも
 せ又さういふなりとていふなりとていふも
 つけさういふなりとていふなりとていふも

石と字物を引つるまゝに 一万葉集云

船

都くふうんりひあや

同云阿さ新とよめる春のやとさるるは
 寂しそく久建又これ冬するとも人づか
 春云これ冬するとも春とよはるるは
 うひやいさうらうと相うむむ表なすとも
 らん物うとともいふは表もさるるは
 ういひのやうなもれは新とよはるるは
 もわの又万葉集ういふとも新とよはるるは

三子

わさきは 八重山 へ 行く こと

あはれうきやうな

又云

秋乃田北男
まねふ
羽
毛

そのころより燕御堂

又人見奇云

長山乃くはもろく
ひとし

[illegible]

王陳大綱之奇也

[illegible]

三回云神風伊勢とてあつたといふ地
 吾云わづらひとてあつたといふ地
 みよとて川は神風とてあつたといふ地
 三回云神風伊勢とてあつたといふ地
 吾云わづらひとてあつたといふ地
 みよとて川は神風とてあつたといふ地

うゑとて此の人よりこれの 日中記云無仁
天皇廿年三月朔天照大神豊維姬命は
新く倭姫命はけりまふ倭姫命を都と
あつめさせしむる所をもむる荒田乃藤原は
詣さよふりく近江より入東廻美濃と
そこの國より時天照大神倭姫命より
つゝのゝよりこれ神風伊勢國よりこれ常
世の浪重浪帰國へ倭國乃菟國へけり
居とてぬる神のそへむらむるもの
そこの國よりこれ新美とみすけ河の
よる興つとてそのやとてより天照
大神よりけりあふりくこれよりこれより
是よりけりまふてこれ万葉云

神風やいせのち藤原のあせ
をむらむる神のそへむらむるもの

うゑとてこれよりこれよりこれよりこれより
新美のあせ

四問云何とてこれよりこれよりこれより
答云日中記云天智天皇はこれのあつた
りけり時佛尊と建立のけりこれよりこれより勝

と云ふに百千返の義は、たゞひぬく
或書云郭公ハ山城守ありきと卷と云
半あき心よりうると都よりいよみけりや
六問云 勅乃弟あきとハ何ぞ

[illegible]

表はふハ鰯の食さるに足るしども
 玉登るは御の疾一君のあはれと
 或人の筋よの将作のしとてとて云
 としこれをもよほしのともえとあはれ

二
つらうりさ文は車れさあわさ古き云

とらうまれりさひもとれさハ

わさいねささささひもれり

十回云 ゆりことさハなる事そ

答云 或文云 瀬げ字とゆらことよむ又瀬障

子ともあり或物よ目結ともさるあさ云

しつさ乃ゆらささむさむされの

わらん何りささひのさる

しつさともさる乃ゆらささのさるれさ

しつされささむらと或物よさけり又あ

屯ハさささあんとわさあゆさハ故將

作の奇さともさるさる

とささささささささささ

神さささささささささ

十回云 せのつさささ人ともさる

后のさささささささささ

さつささささささささ

佛僧ささささのさささささ

献芹さささ文のさささささ

答云 さささささささ 但或人さささ

[illegible]

文集云

繚綾念女工之勞 賞困 之きくのきき
やいばきききききき

法花經文云

生疲勞耶 是佛とてきききききき
同也

大和物語よりききの女れ詞云

人乃きききききききききききき
又云あきききききききききききき
きききききききききききききき
きききききききききききききき

きききききききききききききき
きききききききききききききき

其問云きききききききききききき

答云或物よりきききききききききき

あきききききききききききききき

きききききききききききききき

あきききききききききききききき

きききききききききききききき

屋きききききききききききききき

問云或説は和名はうねむきといふ草の華
葉といふに里又三枚葉といふもの三枚と云
はれりといふに又いふにや又三枚といふ
といふなる物やいふに又いふに草の華
といふ草といふものといふに又いふに
てはくはるの草といふに又いふに草の華
といふに又いふに草の華といふに

答云いふに又いふに草の華といふに
十問云いふに又いふに草の華といふに

答云いふに又いふに草の華といふに
人といふに又いふに草の華といふに

あといふに又いふに草の華といふに
いふに又いふに草の華といふに

いふに又いふに草の華といふに
いふに又いふに草の華といふに

又曾丹新云

いふに又いふに草の華といふに

いふに又いふに草の華といふに

いふに又いふに草の華といふに

いふに又いふに草の華といふに

ひさうんとふらねとつひく——けり
神あまゝと又屏風の奇なりてなれば
あまねとてとれん名のふりよむひり
てふあまゝとてハ貴之集ふと又ふり

中
久

是も之を公に神とわ

神乐乃おる見か記云素勢烏^{そせう}乃^の此^{この}堂^{どう}
さ^{ッヤ}阿^アらき^ヤ所^ヤと^ヤ天照を神阿^ア主^ミ意^イ
志^シ屋^ヤ子^シの^ノ心^{ココロ}と^ヤ成^{ナリ}ら^レて^ヤ色^{イロ}と^ヤ成^{ナリ}

何國のうらとるやとてあそびあはれくると
 大蛇とりてくたれふやとてあつひの糸
 そらほろまのうとてあそびあはれくると
 ととのく日像ひのよう乃鏡なみと鏡かみと鏡かみと麻あしとて
 あはれくるとてくたれふやとてあつひの糸
 穀こ木のきとてくたれふやとてあつひの糸
 けくうきく一夜はあはれくると
 うきあひの神は神女かみめくたれふやとてあつひの糸
 大蛇小蛇のきとてくたれふやとてあつひの糸
 のか山乃い又また百箇ひゃくかん真賢まけん木きと掘ほりてくたれふやとてあつひの糸
 穀こ木のきとてくたれふやとてあつひの糸

[illegible]

國乃字とて海ともいふじ又すつろのよにあ
らるゝ我より世に生れぬもといふさく物なり
せむろけりさてさうの世ハ馬を御せん
ましももしもふもといふもの生れつゝ十訓しじゆんの
るとあるやこの年より一町と地あり
大貳三位尊云

とてはしるゝを今うり
らばふくふくもたふす

又賀茂女は長子なりといふとせば、
つぎハ、
ひとも十列とある

同云、のちなるもまゝとてふべし。日本記は
あつとも然らむ。や伯孫とつきの月夜は
ゆひ、みづれ輿田ウツタのみうきありおそる
このきりものはあつたものとあらう。一
よりいへば、なりなりとさひつんとするに
は、駿うまるの如く伯孫なり。けうをあらう
ともしてるとかゝるさぬ伯孫にてわが
えんもふらうのわが——さうしてけうは参田
のみうきなり。や馬あるは同は河のとて入るに

のちる紙をとりしとてそのあつちやあつち
もはるのちる人へは駿馬とみゆきとまうふ
もあつちのよきとてさういふ車もまうふ
とまうふよきとてさういふ車もまうふ
うてや十列のちる義もさういふ
答へにまうふとてあつち又ふれとて十
列のちるとてあつちとてさういふ
うてや十列のちる

大問云湯津乃御まらういふとてさういふ
答へにまうふとてあつちとてさういふ
問はるのちる人へは駿馬とみゆきとまうふ
もあつちのよきとてさういふ車もまうふ
とまうふよきとてさういふ車もまうふ
うてや十列のちる義もさういふ
答へにまうふとてあつち又ふれとて十
列のちるとてあつちとてさういふ
うてや十列のちる

[illegible]

10
 の
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

十九問云 諧謔 委趣 如何

濟妙義也杜贊頤不定

傳云

淳于髡滑稽多辨

是等滑稽大意也

俳諧の字は是よりよひく是よりあてまふ

傳云

斃曰何敢王曰咲有說乎斃曰臣從東方來

學古堂

是等心并說也

齊主使淳于髡獻鵠於楚道蜚其鵠徒揭
空籠造郢成辭往見楚王曰齊王使臣獻鵠適
於水上不忍鵠之渴出而飲之去我蜚已昔

飲刺腹而死恐人之議吾王以爲獸之故令士自傷
殺吾欲買而代之是不信而欺吾王欲赴他國奔
亡痛吾兩主使不通故來服適受罪太王楚王曰
善王有信士若此哉厚賜之財倍鵠在時也

古今事云

世中乃多事乎
つゝと谷うそ河うそなりうそ

是等詞并説也

魏文侯時西門豹爲鄴令豹到鄴會長老問之
氏所疾苦長老曰苦爲河伯娶婦以故貧豹問
其故對曰鄴三老廷掾賦歛百姓収其錢得數
百萬用其二三萬爲河伯娶婦與巫祝共分其
餘錢持歸當其時巫行視家女好者云是當爲河伯婦郎嫂
治齋宮河上張緹絳帷女居其中行餘日共粉
飾之如嫁女牀席令女居其上浮之河中行數
十里沒其人家有好女者以故多持女遠逃亡
以故无久又困貧豹曰爲河伯送女告之吾亦往
送女皆譴至其時豹往會之河上往觀者其巫老女
子也從弟子女十人求豹曰呼河伯婦來視其
好醜女來豹曰是女不好煩大巫施爲入報河伯

古今事云

始皇議欲大苑囿東至函谷關西至雍陳倉優
旃曰善多縱禽獸於其中冠後東方來今麋鹿

是等詞利口也

始皇議欲大苑囿東至函谷關西至雍陳倉優
旃曰善多縱禽獸於其中冠後東方來今麋鹿
觸之足始皇以故輟止

古今事云

世中ハツラキモノト云フ者
一ツノ人ノミツラキモノト云フ者

是等心狂也

優旃者秦倡俳儒也秦始皇之時置酒而天雨
陛楯者沾寒洊哀之曰汝欲休乎皆幸甚旃曰
呼汝應曰諾有頃殿上壽旃臨檻大呼曰陛
楯郎白諾旃曰汝雖長何益幸雨立我雖短
固幸休居於是始皇使陛楯者得半相代
古今事云

是乃世のまけと事象れつもの
もなきものなりと世の中
是等詞利也

なほむのけもむふよるはあつまつて
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

同云俳諧の趣如釋ふふふふふふふふ
詠諧のふふふふふふふふふふふふ
答云ふふふふふふふふふふふふふ
のふふふふふふふふふふふふふふ
てやふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
四季雜部ふふふふふふふふふふ
ねふふふふふふふふふふふふふ

平同云譬喩^ひ奇と六義の風比興等。歌ふふふ
答云毛詩并萬葉集ふふふふふふふ
喩^ひ奇也ふふふふふふふふふふふ
利を風八題をわふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
る何ふふふふふふふふふふふふ
是乃ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふ
故六義は利之仍毛詩は風雅頌を釋ふ
比興とふふふふふふふふふふふ

とよむるうゆへに離騷と号とふるはなす
とよむるへとふく又人ふに離騷ハ屈原離騷
と色うはるうふ都のわつととふく是と案
とてふのなすとふる中ハ離騷ハ不離騷
ゆへに離騷ハ都とつてはる中一字は離騷
あつて人色もわわのうゆへに又ハ離騷
ととてううは同うはと離騷ハとてはる
くもいつむやあな之音はるうのう不
ううはわる故んうあくの説也とふひ
とふわつととふく古今序遠素茂鳥尊

到出雲國始有二字之字之故今なすと作也
ハ如氏ハ九字一字となすと可離騷

其問云六句并と連讀并と名め也

答云連讀ハ一字とふくもむく音もろくも
ろくゆへに讀成式ハ一字と雙本と名つ
く連讀ハ一字とふくもむく音もろくも
古今序ハ一字と并と離騷是又とふく
ハ一字と并の義ハとふく

問云昔遠義ハ
答云神代ハ并の章
句不変とふくはるハ一字の義ハとふく

二年子新也来そのらひと人よは神と云ふ
如く哉二年子乃らひと人よは神と云ふ
六句の詠も^{不謂楚以}和衆^并也 往者の奇跡と云
ふよりる昔よりる人よと云ふ如く
と云ふも意趣ハ日と月なり

苗田云混本奇と喜撰奇^{ひめ}終^{ひめ}始^{ひめ}の式は後梅
病奇と梅中奇来ん

吾云音韵不叶ゆへは後梅病と梅又云
云云句の中より一語をとりて一語の
二句成とて一語之性音の辨ありと云ふ

混中奇と云ふゆへはと云ふ
うき又音よりる趣意趣旋終奇は
るるゆへは或書より旋終奇混中奇と梅
文選序云

至於今之作者異于古昔古詩之神今則
全取賦名

又常寂未且求衣賦序云

賦古詩之流詩蓋志之所之歌又如楚辭
古歌之流奇志之所之旋頭混本同古歌
流也

本云
正和五年應鐘北七以清輔朝臣自望下之
本書寫比校

慶安五土辰曆

五月吉日
上村次郎右衛門
板開

奥儀抄下終

正和九年應鐘。以清輔。臣自
本書寫此校

慶安五^上曆
五月吉亦
上村次郎右衛門
板

與儀少下終

254

